

特別講演

遺伝性乳がん卵巣がん症候群を踏まえた乳がん診療の変化

地方独立行政法人 山梨県立病院機構 山梨県立中央病院
がんセンター局長 (乳腺外科) 中込 博

乳がんは女性の癌では最も罹患率が多い癌です。全国では 10000 人、山梨県では 500 人弱の女性が毎年、乳がんを発症しています。早期発見により、乳がんで死亡する頻度は低く抑えられ、また乳房を温存することも可能、乳がんは恐れる癌ではありません。

しかし、Next Generation Sequencer(NGS)によるゲノム解析が導入され、乳癌診療はさまざまな側面から見直されています。特に 2013 年アメリカの人気女優アンジェリーナ ジョリーが遺伝性乳がん卵巣がん症候群 (HBOC ; Hereditary Breast Ovarian Cancer) を発症させる BRCA 遺伝子の変異をもつことから、予防的乳房切除をうけたことが世界中で話題となり、日本でも HBOC に関する意識が急速に高まりました。そして、それは検診、手術、薬物療法の考え方を変え、さらには患者のみならず家族のケアの必要性も啓発する内容になっています。

乳腺外来を受診する方の家族歴を把握、そして個々の乳がん発症のリスクを考えながら、その方に合った検診方法を提示していくことの必要性が認識されてきました。手術も乳がん発症のリスクが高い方には乳房温存療法よりも乳房切除と乳房再建を進めるべきとの考えに変わってきています。そして、HBOC の遺伝子検査も行い、変異があることが分かった場合本人のみならず家族のケア、経過観察も必要な診療内容になってきています。

HBOC の考え方を踏まえ、過去、現在、そして未来の乳がんの診療の内容を紹介したいと思います。